

# セリ科の魅力

芳香に誘われるままに

## 香りが

## いやしの役目も



ガオウゴン。シソ科、コネバチの根茎。サイコ組んで漢方処方に入っている。

セリ科の柴胡(さいこ)の苗を育てていたころのことだ。三センチほど伸びたものを引き抜いて捨ててあった。「こまめなはずらをしていいるなあ」と思っていたら、あくる日に犯人を見つけた。隣の猫が苗をなめて抜いていたのであった。柴胡は葉の香りがよい。ほ乳動物は、セリ科の植物に、ある種共通の反応を示すのではないかと考えている。目を細めて柴胡をなめる猫の姿は、いやしそのものの構図である。鹿児島県立自然薬草の森では、陽性の場所に、セリ科の当帰(トウキ)を植えている。陽性とは一日中、日があたり、排水もよいところを指す。四月から十月の毎週日曜日に、「自然薬草の森協定会」のメンバー

の薬剤師らがローテーションを組み、薬草教室を開いている。筆者が当帰のときは、陽性の場所に植えた当帰の前で必ず長い説明をする。当帰は、春先から晩秋まで色濃い緑の葉をつけるので、それをちぎってもんで「香りを楽しませよう」と勧めると、「あら、いい香り」という人が八〇%、「ん？」が二〇%だ。当帰の香りを「いい香り」と感じる人は、当帰芍薬散(とうきしゃくやくさん)という処方合う。そうでない人はおそらく牡丹皮(ぼたんぴ)の香りに反応すると考えられるので、桂枝茯苓丸(けいしぶくりょうがん)が合う。フイトンチッド(森林浴の効用がある樹木が出す揮発性物質)の多い薬草の森の静けさの中で、セリ科当帰の香りを楽しむのは、同じセリ科の柴胡の苗を引き抜いてなめる猫と、根っこの部分でどこか重なっているのでは。そんな思いにかられることがある。小さい子供は当帰の香りを嫌がる。子供は発陽性で血行

もいたため当帰とはじき合うのである。本欄で寺師睦宗先生が不妊症の患者の中で、冷えの強い人に長期間、当帰四逆湯(とうきしぎやくとう)を与え、その後、当帰芍薬散を投与して妊娠したという症例をよく引用している。覚えておくところか。原典は金匱要略(きんぎようりやく)の婦人病編。『婦人懐妊腹中疝痛』(ふじんかいにんふくちゆうきゅうつう)妊娠中に起こる腹部の差し込むような痛み)の人は、これを用いなさい」とある。昭和四十年年代の後半「朝鮮人参(にんじん)を栽培しているのを見てほしい」という依頼をしばしば受けた。調べてみると、ほとんどが「セリ科当帰」だった。朝鮮人参はウコギ科で葉の型が違う。「人参の苗を譲ってもらった」つもりが、初めから違っていたわけだ。最近はこの間違いはなくなった。